

投稿論文

異形の詩学

—松浦理英子『葬儀の日』をめぐる

今村 純子

Key Words 美、不幸、純粋なもの、悪、巨獣

はじめに

松浦理英子（1958-）のデビュー作『葬儀の日』（1978）は、『ナチュラル・ウーマン』（1988）にいたるまでの「異形の系譜」の原石となる短篇小説である。今日では禁忌とされる、白痴、老婆、気狂いといった言葉を多用しつつ、非日常的な不気味さ・異様さを背景に、死や老いといったものに深く関わりつつそれらを嘲笑する仕事に従事する者たちの意識、あるいはまた、わたしたちが通常「なかったこと」にしがちな、自らのうちに湧き起こる邪悪さや醜悪さはらむネガティブな感情を、鮮烈な光のもとにさらしてみせる。

かのプラトンは、社会を「巨獣」に譬え、この「巨獣」の好き・嫌いが善・悪を決定することを詳かにしている¹。松浦が描く人と人との関係性／方向性をめぐるさまざまな問題系は、この「巨獣」から「異形なるもの」とみなされた人物たちがその感情を押し潰され、捻じ曲げられながらも、いかにして自らの個性と資質を失わずに自らの生を創造しうるのかを求め、そしてその落魄する様を描き出している。その極北に『葬儀の日』は位置している。

シモーヌ・ヴェイユ（Simone Weil, 1909-43）は、ギリシア悲劇やプラトンの作品から強烈なインス

ピレーションを得て、本来ならば交わらないはずの平行線は「無限遠で」交わるという非ユークリッド幾何学的直観をその詩学の支柱に据えている。

本論では、シモーヌ・ヴェイユ詩学の視座に立ち、松浦理英子初期作品全般を念頭に置きつつ、『葬儀の日』に焦点を当て、「異形の詩学」と呼ぶべきものを浮き彫りにしてみたい。

1. 詩学の逆説

昨日の葬式はとてもうまく行った。行き過ぎたくらいだった。私は極めて真に迫った泣きっぷりを見せ、それを見た参列者たちは充分悲しい気分をつくり出すことができたのである。もともと私は、仲間内でも、「泣き」の名手ということになっている。私の泣く姿を眼にすれば、大方の人が涙を誘われたものだ。私が単に商売で泣いている「泣き屋」に過ぎないとわかっていても。その私がこの道に入って以来の最上の出来映えだと認めるほどの首尾だった²。

小説『葬儀の日』はこう口火を切られる。儀式はわたしたちの生に秩序と形式を与える。「美しい行為とは、じっと見つめられ、物語られることによって、儀式となる」³とヴェイユは述べている。だが、人の死を弔う儀式たる葬式が通常わたしたちの意識に昇ることはない。ましてや「泣き屋」という職業は、ほぼ「ないもの」とされている。さらに本作品は、「葬式という行事が本質的に持つ欺瞞が我慢できない喪主が、皮肉な演出として時折呼ぶ」⁴「笑い屋」という架空の職業をも挿入する。そうして本作品は、「社会的威信の剝奪」を背景に、幻想世界を築くことになる。

仕事のたびに一緒になる笑い屋を知っていた。十五歳の時に初めて同じ葬式で顔を合わせた。以来同じその人間と、仕事のたびに必ずはち合わせるのだ。雇い主は皆違うし、この上なく皮肉な演出家がそういるとも思えないのに、常に、私がいれば彼女もいた。[…]眼も合わせず足跡も嗅がなくとも、彼女の存在は空気の濃密さでわかるのだ。大勢の参列者たちの間を縫って続く彩りのある流れを辿れば、その果てに彼女を知覚した⁵。

「自我の破壊」を経た後の完全性の境地を「わたしたちは、生まれながらに、ゼロよりもはるか以下の者である。ゼロは、[…] 極限值である」⁶、とヴェイユは語る。無や不在は認識不可能である。というのも、無という何か、不在という何か、を否定なく思い浮かべるからである。わたしたちが認識しうるのは、小さき白い花や遠く輝く星々のような儚さや遠さといった「ほとんど無」、⁷「ほとんど不在」のみである。そしてこの状態が社会的次元に移された場合こそが「不幸な人」である。不幸な人はいっさいの「社会的威信」をまもっていない。そこにいるのにいないモノとされている、あるいはモノがそこにあるようにされている。ヴェイユは不幸な人の例として難民、黒人奴隷、病人、前科者などを挙げている⁷。

『葬儀の日』の「わたし」や「あなた」もまた、

難民、黒人奴隷、病人、前科者といった「不幸な人」と同様、「そこにいない人」として、モノのように扱われている。だが彼女たちは「不幸な人」ではない。というのもまさしく、ヴェイユが述べるように、「自分自身に対する軽蔑、排斥、嫌悪は不幸の本質そのものである」⁸ならば、「自分自身に対する軽蔑、排斥、嫌悪」が彼女たちにはいっさい見られないからである。

無能で盲で不完全な状態を選んでいる私たちは畸形児なのだ。それも彼らが昔そうであったところの不完全な畸形児。／一面では嫉妬の対象でもあっただろう。同じ場所を守っていられることで。彼らが昔未練を残しつつ振り払ったものを持っていることで。この畸形児は美しいのだから。自分の美しさを誇っているのだから⁹。

なぜ人々が彼女たちを「そこにいない人」として扱うのか、その答えを彼女たちは知悉している。それはまた、「何か光っているのを見た幼ない子どもは、その光りかがやくものが欲しくて欲しくてたまらなくなり、自分の力ではとてもそこまでたどりつけないのを、すっかり忘れてしまって、自分のからだ全体をそのものの方へと伸ばす」¹⁰とヴェイユが述べるそのありようを生きることでもある。「そこで、その子の母が、その子を抱いて、そのものの近くへと寄せてやる。こんなふうに、わたしたちも、小さな子どもとならなければならない」¹¹。わたしたちがなしうるのは光を渴望することだけであり、光のほうへ身を寄せるのは、わたしたちを超えたものによる。それゆえ、社会たる「巨獣」に好かれていない彼女たちは、外界との遮断という陥穽から逃れられてはいない。

一人でも笑う、ニコチンとタールで捏ね上げた煙幕を張って外界を遮断して。完璧に一人になって回帰する波に漂って。そういう完全な行為のさなか、むらのある煙幕の破れそう

に薄い箇所から透けてあなたが見えた¹²。

若い女性が煙草を吸う仕草そのもののうちに、自らを取り巻く世界に対する虚勢が見られる。さらにここには、「自分自身に対する軽蔑、排斥、嫌悪」を「ニコチンとタール」という物質的な毒を充満させることで相殺し、均衡を保ってゆこうとする姿がある。煙幕から透けて見える「あなた」は、視野の片隅に誰かを知覚するだけで心がかろやかでいられるありようである。「彼女という時がいちばん自然だったのだ。[...] 要するに、他の者に対しては不誠実ではないにしろ不自然だった¹³。「あなた」は、「悪によって魂が満たされているとき、完全に純粋なものに悪の一部を移し替えて完全に純粋なものに注意力が向けられるならば、完全に純粋なものは悪によって変容を被らない¹⁴とヴェイユが述べる、「完全に純粋なるもの」である。それゆえ楕円のふたつの焦点のように、葬儀場でふたりは均衡を保っている。

2. 関係性とは何か

古ぼけたアコーディオンを無意識に上下に撫でるかさかさした手。私の眼はその粗雑な動きを追う。老婆の欲求不満となおも断ち切れぬ生への執着を見る思いがする。あなたたちは曖昧さに甘んじた。あなたのあれについては何も知らないが、きっと今頃はけたたましく響くカスタネットか何かを舐め、同じように欲求不満と執着心に悶々としているのだらう¹⁵。

本作品冒頭から掉尾にいたるまで、「泣き屋」であり「笑い屋」であり、ときに両者が入れ替わる主人公をじっと見つめているのは、アコーディオンを奏でる老婆である。本作は、老婆の語りによって、過去を追憶しつつ現在の時間が進行してゆく。まさしく、「宇宙は追憶からなっている」¹⁶

のであり、わたしたちの生は物語に守られている。

老婆と老婆の「あれ」は、そうなるかもしれないなかった彼女たちの姿でもある。着目すべきは、この老婆たちが楽器へ依存しているという点である。「恋人が亡くなった愛する女性が使っていた針を優しさをもって見つめるようなものである¹⁷とヴェイユが述べるような、痛覚という感覚を捨象してそこに不在の人を立ち上がらせるような働きをモノがもちえず、楽器というモノがモノに留まるありようである。「リズムの狂った白痴的に明るい感じの曲調が、アコーディオンの腑抜けた音色の悲しさと妙に調和している¹⁸という老婆の生きる速度はゆるやかで、「あんたたちと来たら、本当に過熱していたよ¹⁹というような速度を自らは見せない。

彼女がガラス越しに声をかけたが、外に聞こえるはずがない。だが幼女は嬉しそうに何か言った。私たちの方にも声は聞こえない。ガラスというのは、視覚的には開かれているが、聴覚的には閉じられている。[...] /外へ出てみると、どこにも幼女の姿はなかった。ガラス越しにしか存在し得ない影のように消えてしまった。驚くべきことに、私たちはそのことに全く驚かなかった²⁰。

幼女とのガラス越しの邂逅。黄昏時の自然光の淡い光と、天井の高さと奥行きを感じさせるカフェーの人工光との焦点となってたたくむ幼女の姿が、あたかもムンクの絵画のように際立っている。この幻影のような幼女は彼女たちのかつての姿でもある。だが幼女は、あたかも「社会的威信の剥奪」からの感染を避けるかのように、ふっと彼女たちの前から姿を消してしまう。

彼女の袖を引っばる、眼を見開いたまま。彼女は私の示す方を見る。顔色を変える。／交差点。赤信号。青信号を待っている私たちの横に止まっている車。その助手席に、一年

も前にカフェーのガラスの向こうにいた、あの幼女が坐っていた。当時よりずっと大人びて。間違いはない。あの子だ。今またガラス越しの出会い²¹。

彼女たちの身振りの動きと、不動のモノと同化した車との対照。たった一年で幼女は人格を備え、助手席には幼女に忠実な紳士が座っている。「聖なるものとは、人格であるところか、人間のうちなる非人格的なものである」²²とヴェイユは述べる。そうであるにもかかわらず幼女は、社会性へと、巨獣の好みに合うほうへと成長している。「はっきりとは言いがたいが、別の何かになっていた」²³。さらに幼女はガラス窓を開けて、「決定的な力を主張しようとしている」²⁴。だが、「力が徹底的に行使されるとき、力はもっとも文字通りの意味で、人間を物にする」²⁵とヴェイユが述べるように、力を行使するその人もモノとなる。この幼女は、そうありえたかもしれない彼女たちの過去の姿でもある。畸形から普通へと「変節」してゆくこと、それはいみじくもヴェイユが不幸を、人々が自分を見る目が根源的に変わる「変身」と名指したそれと正反対の営みである²⁶。己れのうちなる「畸形」を虚偽で覆い隠して生きることは、彼女たちが選択しえたが選択しなかった道である。「究極のところでは変質することのない自分を信じていたからだ」²⁷。

「もう何年くらいやっているんですか？」
／「忘れました。今は十七歳です。二十年間やって来た、と答えてもかまいません。[...]」
／「ではどこに住んでいるのです？」
／「全くありふれた所に。たとえば、あなたの足の裏の水虫の中に」²⁸。

彼女たちへの「軽蔑、排斥、嫌悪」を露呈したかのようなインタヴューアーとのやりとりである。このような意表をつく応答を彼女たちがしても、そもそも「力」となったインタヴューアーの心が揺らぐことはない。というのも、人はモノに

揺さぶられたりはしないからである。だがしかし、ヴェイユが指摘するように、「力は、それを被る者も、それを操る者も、違う仕方ではあるが、ひとしくその魂を石にする」²⁹。そしてまさしく、全く人間味の感じられないこのインタヴューアーが併せ持つ硬質な質感こそが、彼女たちを取り巻く世界の肌触りでもある。

仲間とは、共に寝、共に喰らい、言葉もなく息も確かめず、区別もつけずにそばにいられる者たちのことである³⁰。

本作中、二度登場するこの章句は、「仲間」というものの功罪を暗示している。世間から「軽蔑、排斥、嫌悪」の眼差しを向けられている仲間であればあるほどその結束は固く、自他の区別はなくなる。だがそれは同時に、「群れとなった人間は足し算すらできない。足し算がなされるのは、一時的であるにせよ、他の精神があることをいっさい忘れ去っている精神においてである」³¹とヴェイユが述べるように、「仲間」は、「聖なるもの」への移行を阻む危険性と隣り合わせである。そしてそもそもそのことを彼女たち自身が知悉している。

その理由を考えると——恥に満ちている。別々の綱に掴まっているはずの二人が、今ここで一緒に歩いていて、それぞれの綱の根元を探り当てつつあるのは、どうしようもなく絶望的なことだ。ただし絶望とは快樂だから、私たちは出会いの苦々しさをちゃんと楽しんでいる³²。

自立か依存かの二者択一を人は生きているのではない。あたかも海底の藻のように不気味に揺れ動き、矛盾を呈しながら、息もできない「真空」と、「真空」であるがゆえの歓喜とを繰り返しつつ生を紡いでいる。だが、自ら知悉しているのと他人にそれを指摘されるのとは全く別のことである。ある葬式で、「死にまで至らしめる感受性の

強さ」³³がその肖像から窺える故人の目と同じ鋭さをもったその妹からこう揶揄される。

「[...] 二人で生きながらにして合流して、やっとのことで位置を確保しようとして。皆一人で何とかやって行こうとしているのに。みだりに片割れの手など借りようとしないうちに。近い距離にいたのをいいことに、二人で結びついて安心しようとしたわ。何よ、それは。汚くないと言えるかしら？」³⁴

この葬儀でのふたつの楕円の焦点は、「彼女の骨盤と私の心臓は各自の資質を刺激するため打ち震えていた」³⁵と表現されている。心身二元論に先立って、その中間体として臓器があり、臓器同士の共振がある。そして故人の妹であるこの女性の指摘とは、「悪を解消させる純粋さである」楕円のふたつの焦点ではなく、「これまでにない仕事場での接近。これまでにない空気の厚みの発生。私たちがはっとした時、互いの肩がすれ違わずま軽くぶつかった」³⁶その瞬間、円の中心点となって重なり合い、不安や恐怖を、すなわち悪を、互いに倍増させていたことにある。その直後この女性は彼女たちの目の前で憤死してしまい、「三日間私たち [彼女たち] は高熱に臥した」³⁷。彼女たちは、それだけが完全な喜びである、ヴェイユが述べる「不幸」に一步近づいている³⁸。というのも、「不幸は滑稽なものだからである」³⁹。ここには、楕円のふたつの焦点からもうひとつ上の位相への移行の予感が感受される。「震えもしないほど絶対的な恐怖が、昨日からまるで雑誌やコップのような自然さでそこにあるのだ」⁴⁰。それは、逆説的にも、完璧な調和への移行の好機でもある⁴¹。

3. 自然と人間

動こうとしなかった重い空気が動き始める。

正午近い。/[...] 私のずっと後ろで老婆が狂い咲きの演奏をしている。送別のつもりか。私がここを出て最後の大仕事へ行くことを、私の身に何が起ころうとしているのかを、仲間なら皆知っている。彼女は死んだ。[...] /ごまかしてはならない。今日の葬式は私の最後の仕事だ。今日以後私はなすべきことを知らない。あらゆる意味で今日の葬式が最後だ。彼女は死んだ。今日は彼女の葬式だ⁴²。

老婆から離れてスッと背筋を伸ばし葬儀場へと向かう主人公と老婆との距離は離れるが、アコーディオンの音色はいつそう耳につく。「ゼロがわたしたちの極限值」であるならば、本作品掉尾の「彼女は死んだ。今日は彼女の葬式だ」というこの章句は、主人公の単なる自死以上のことが暗示されているだろう。本作には、「重い空気が動き始める。正午近い」と類似した、「陽の下で私は予定時刻を待っている」⁴³といった、太陽が真上にあることと、あたかも舞踏のアティチュードのような一瞬の停止が重なり合う表現が散見される。これらの章句は、「下降して行く自分自身の姿が私には見えた」⁴⁴という章句と照応している。というのも、黄昏時にカフェーの分厚いガラス越しに出会った少女の影が淡く長い影をひいていたならば、存在するのはこの一点と言わんばかりに正午にひとり立つ主人公の影はいっさいないからである。影がないことは、垂直に自らを掘り下げてゆくことを指示している。「汚点がいっぱいついたコップが、自分がひとかどの者であって、まるで何もかも存在しないように光が通りすぎる、完全にすき通ったコップよりもうんと上等の者であると信じることがある。だから、「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」[マタイ 23.12] といわれるのである」⁴⁵とヴェイユは述べる。主人公たちは、ここで述べられている「汚点のついたコップ」から「すき通ったコップ」への移行の過程にある。

一本の川の右岸と左岸を想像してみてください。そうした関係です。[...] /川の右岸と左岸は水によって隔てられている。同時に水を共有し水を媒介として繋がっている。あるいは水によって統合されている⁴⁶。

先のインタビューアーへの別の応答場面である。川の両岸は、水を媒介にして平行線としてある。両岸が結合するならば、それは川がなくなるときである。そして川がなければ岸は存在しない。「彼女は死んだ。今日は彼女の葬式だ」という掉尾の言葉は、川の両岸という二本の平行線が、位相を変えて、無限遠で交差することを暗示している。

全盲になれたら！ 全盲で、手足もなく耳も聞こえず口もきけず、想念だけで物を確かめることができたなら！ 想念だけがさまよい出して、重なり得る場所を見出すことができたなら！⁴⁷

この願望が結実する一点へと主人公は、いな物語は向かっている。物語は主人公そのものであり、物語は時空を超えている。

季節はそういう季節だった。じきに本物の落葉があのかードに重なるだろう。紅い落葉の中で、私たちの血の付着したカードは見事に調和して、見分けがつかなくなってしまうだろう。やがて埋まってしまうのだ⁴⁸。

ある夢の出来事である。カードの四隅がカミソリで切り落とされており、血まみれになりながら彼女たちはトランプをきる。それはまた、能動的に無であろうとすることの限界をも指し示している。自然である落ち葉と血液が付着した人為的なモノはどこまでも相反しつつ、色彩だけは同一化してゆく。「もしわたしたちも葉緑素を持っているとすれば、わたしたちも、木々と同じように、光を糧として生きる」⁴⁹とヴェイユは述べ

る。だが、ヴェイユが念頭に置いているのは新緑の植物であり、紅葉の、あるいは落葉の木々ではない。

地面から垂直に突き出しているのは、装飾物を払い落として本性を露呈した木々だ。凶悪に枝をくねらせて空に向かって威嚇的なポーズをとる木々。根ざす大地を持っていることだけを唯一の強味として。大地が無限の物ではなく、ほんの小さな球形の塊でしかないことも知らないまま、彼らは朽ち果てるまで上に向かう⁵⁰。

大地に根を下ろすこともまた、「力は、それを被る者も、それを操る者も、違う仕方ではあるが、ひとしくその魂を石にする」人間と同様ではないか、と本作は、無言のうちに語りかける。植物のように生きるだけでは不十分である。植物の生き様にプラス・アルファが不可欠である。だが、そのプラス・アルファは直線的ではなく、蛇行的であり、あるいはまた、地上の植物のように垂直に伸びゆくのではなく、海中の藻のように浮動しつつ、光のほうへ向かっていくその方向性である。

本当に。簡略明瞭に越したことはないのに、それでは立ち向かう力量がないものだから、複雑に虚構をでっち上げて、自らを拘束して、やっと幻想に頼って生きるなんて。惨めだ。／私が泣き屋に生まれついたのも、あなたが笑い屋なのも、そもそもこういう惨めさから発しているようだ。職業とは大義名分だから。何者でもなく生き抜く才覚が備わっていたら、私たちは今夜にでも飛び立つのだけど⁵¹。

この章句は、ある決まった時間に髭を剃ること生きる希望を見出す男の話に続いている。「髭を剃ること」は反自然的であるが、社会的である。葬儀における「泣き屋」、「笑い屋」という職

業というレッテルを隠れ蓑にして、反自然、反社会を擬態することで、そして互いを考え続けることで、認め続けることで、なによりそれは「悪を投げ返してこない純粹なるもの」であるがゆえに、彼女たちはかろうじて彼女たちでありえた。

お互いのことを考え続けていたにもかかわらず、私と彼女の間には交わすものはなかった。考え続けること、認め続けることが、私たちの方法であった。そこから何が生まれて来るかと恐れること、それがいちばん恐ろしい。狂言することのみが均衡の工夫だ⁵²。

本作が描く「異形」とは、怪奇趣味や異常な欲望ではない。生殖や種族保存といった自然に隷属することなく、誰にも依存せず、なおかつ共存しつつ、自らが自らであり得る、その方向の提示である。それは、肉体の死をも包含する「自我の死」への過程でもあり、「自我の死」をもって至高の歓びに与れるか否かは、本作を受け取った読み手ひとりひとりに委ねられている。

結び

松浦理英子は、富岡幸一郎との対談で、こう語っている。「このお二人 [河野多恵子と倉橋由美子] はもちろん違うタイプの作家ですが、共通したところがあるとすれば、既成の秩序なり上部構造なりに立ち向かうことでは解決がつかないほど、過剰な感性と肉体を持ってしまったという、ありかただという気がするんです」⁵³。溢れ出る感受性と肉体を自らもてあましてしまっているのは、松浦理英子その人でもある。「誰彼かまわず肖像画を描いたり、小箱を収集したり、文章を綴ったり、鏡を彩ったり、氷を解凍したりしたのだ。[...] 彼女と出会って以来、そのような自家発電趣味の類の代償行為はいつさいやっていない」⁵⁴と『葬儀の日』の主人公に松浦は語らせてい

る。「自家発電」ではなく、別の位相への移行を促すのが松浦の文学であり、また松浦の作品を手にする読者にとっての文学でもある。

「密度が低い時に体積が大きいのは肥満しているということだ。肥満などしたくない」⁵⁵。この章句は『肥満体恐怖症』（1980）に変奏されるテーマであるが、余剰、余白を許さない生はわたしたち誰しもが通過してきた過程であり、それを松浦の作品は否応なく見つめさせる。

「フランスで子どもに配給されている以上の栄養は取らない」と食料を拒否して夭折したシモーヌ・ヴェイユについて、もっとも親しい友人であったペラン神父はこう述べていた。

幅の広いベレー帽をかぶり、大きな茶色のマントをはおり、ぶかぶかの靴をはいたシモーヌに出会ったというだけで充分であった。とりわけ、人や状況を慮ることがまったくなく、彼女にとってただひとつの〈真理〉だけを感じ取るために、自分が真実だということに彼女が主張するのを耳にしたというだけで充分であった。彼女の考えを議論することはできる。だが、彼女の真摯さを疑うことはできない⁵⁶。

注

- 1 プラトン『国家』（493a-d）。「この動物が好きなのを善と呼び、嫌いなものを悪と呼びます。善悪の区別のための根拠がほかにはないのです。必要なものを正しく美しいものと呼び、必要の本質と善の本質とがどれほど異なっているのかを見ることも、他人に示すこともできないのです」（『国家』第六巻493c）ヴェイユによるプラトンの翻訳・引用。シモーヌ・ヴェイユ、今村純子訳『前キリスト教的直観』法政大学出版局、2011年、85頁。
- 2 松浦理英子『葬儀の日』河出文庫、1993年〔単行本：文藝春秋、1980年〕、9頁。
- 3 シモーヌ・ヴェイユ、今村純子編訳「美と善」『シモーヌ・ヴェイユアンソロジー』河出文庫、2018年、57-58頁。
- 4 松浦理英子『葬儀の日』11頁。
- 5 同前、11-12頁。
- 6 シモーヌ・ヴェイユ、田辺保訳『超自然的認識』勁草書

- 房、新装版1992年〔初版1976年〕、393頁。
- 7 「場合によって、貧者であったり、難民であったり、黒人奴隷であったり、病人であったり、前科者であったり、あるいはこの種の他のものであったりする。その人になされる酷い扱いと親切は、いずれも、その人が他の多くの不幸の一例となっている不幸に向けられている。こうして酷い扱いと親切は、その人を力づくで無名性のうちに置く効力をもっている。どちらも、同一の侮辱の異なるふたつの形態である」シモーヌ・ヴェイユ「神への愛と不幸〔後から発見された数頁〕」『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』286頁。
- 8 「自分自身に対する軽蔑、排斥、嫌悪は不幸の本質そのものである。自分自身への軽蔑、排斥、嫌悪がないところに不幸はない」シモーヌ・ヴェイユ「神への愛と不幸」『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』241頁。／シモーヌ・ヴェイユ、今村純子訳『神を待ちのぞむ』河出書房新社、2020年、181頁。
- 9 松浦理英子『葬儀の日』68頁。
- 10 シモーヌ・ヴェイユ『超自然的認識』345-346頁。
- 11 同前、346頁。
- 12 松浦理英子『葬儀の日』15頁。
- 13 同前、26頁。
- 14 シモーヌ・ヴェイユ「神への暗々裏の愛の諸形態」『神を待ちのぞむ』259-260頁。
- 15 松浦理英子『葬儀の日』17-18頁。
- 16 シモーヌ・ヴェイユ、今村純子訳『前キリスト教的直観——蘇るギリシア』法政大学出版局、2011年、175頁。
- 17 シモーヌ・ヴェイユ「神への愛と不幸」『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』253頁。／『神を待ちのぞむ』189頁。
- 18 松浦理英子『葬儀の日』10-11頁。
- 19 同前、19頁。
- 20 同前、33-34頁。
- 21 同前、52頁。
- 22 シモーヌ・ヴェイユ「人格と聖なるもの」『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』320頁。
- 23 松浦理英子『葬儀の日』52-53頁。
- 24 同前、53頁。
- 25 シモーヌ・ヴェイユ『「イーリアス」、あるいは力の詩篇』『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』117頁。
- 26 「ひとりの人間が、その人自身の目にも、人間の状態から地べたをのたうちまわる半分押しつぶされた虫の状態に変身することは、頽廃した人であっても喜びを見出せるような働きではない。賢者も英雄も聖人も、この変身に喜びを見出すことはない」シモーヌ・ヴェイユ「神への愛と不幸〔後から発見された数頁〕」『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』293頁。
- 27 松浦理英子『葬儀の日』46頁。
- 28 同前、27-29頁。
- 29 シモーヌ・ヴェイユ『「イーリアス」、あるいは力の詩篇』『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』173頁。
- 30 松浦理英子『葬儀の日』12頁、38頁。
- 31 シモーヌ・ヴェイユ「人格と聖なるもの」『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』324頁。
- 32 松浦理英子『葬儀の日』16頁。
- 33 同前、39頁。
- 34 同前、42頁。
- 35 同前、38頁。
- 36 同前、40頁。
- 37 同前、43頁。
- 38 「不幸、あるいは美の感情による純粋な喜びがそれである。美こそが、いかなる個別の合目的性もたず、ただちに合目的性のあらわれを感じさせるがゆえに、この力を有するのだ。不幸とこの上もない純粋な喜び——ただふたつの道であり、等価な道である。だが、不幸がキリストの道となる」シモーヌ・ヴェイユ「ピタゴラス派の学説について」『前キリスト教的直観』194-195頁。
- 39 シモーヌ・ヴェイユ「神への愛と不幸」『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』247頁。／『神を待ちのぞむ』186頁。
- 40 松浦理英子『葬儀の日』45頁。
- 41 「キリストの叫びと〈父〉の沈黙とが交響し、至高の調和を奏でる。あらゆる音楽はその模倣にほかならず、わたしたちのうちで最高度に悲痛で甘美な調和による音楽であっても、この至高の調和にははるかに及ばない。全宇宙はその微小なかけらであるわたしたち自身の存在も含め、この至高の調和の振動にすぎない」シモーヌ・ヴェイユ「ピタゴラス派の学説について」『前キリスト教的直観』195頁。
- 42 松浦理英子『葬儀の日』70-71頁。
- 43 同前、20頁。
- 44 同前、13頁。
- 45 シモーヌ・ヴェイユ『超自然的認識』393頁。
- 46 松浦理英子『葬儀の日』29-30頁。
- 47 同前、37頁。
- 48 同前、49頁。
- 49 シモーヌ・ヴェイユ『超自然的認識』275頁。
- 50 松浦理英子『葬儀の日』49頁。
- 51 同前、25頁。
- 52 同前、64頁。
- 53 松浦理英子＋富岡幸一郎「〈畸型〉からのまなざし」、松浦理英子『セバスチャン』河出文庫、1992年、206頁。
- 54 松浦理英子『葬儀の日』20-21頁。
- 55 同前、22頁。
- 56 シモーヌ・ヴェイユ「序文（ペラン神父）」『神を待ちのぞむ』52頁。

参考文献

松浦理英子『ナチュラル・ウーマン』河出文庫、1991年〔単

行本：トレヴィル、1987年]

松浦理英子『セバスチャン』河出文庫、1992年 [単行本：文藝春秋、1980年]

松浦理英子『葬儀の日』河出文庫、1993年 [単行本：文藝春秋、1980年]

シモーヌ・ヴェイユ、田辺保訳『超自然的認識』勁草書房、新装版1992年 [初版1976年]

シモーヌ・ヴェイユ、今村純子訳『前キリスト教的直観——蘇るギリシア』法政大学出版局、2011年

シモーヌ・ヴェイユ、今村純子編訳『シモーヌ・ヴェイユ アンソロジー』河出文庫、2018年

シモーヌ・ヴェイユ、今村純子訳『神を待ちのぞむ』河出書房新社、2021年

